

喜界島の産業と歴史

河 本 雄 志

喜界島(さかいがじま)は奄美郡島中、大島本島の東方、東経 $129^{\circ}56'$ 、北緯 $28^{\circ}20'$ の位置にあつて、鹿児島南方379km、名瀬より66kmの太平洋上にある。鹿児島港から船で約13時間かかる。

地形は南北に長くて14km、東西に短かくて最大幅5km、周囲45.2km、面積55.71km²で、奄美群島中才四番目の広さである。又、最高203.6mの「百の台」(面積約5km²)を中心として、その西部及び東北部に展げ、隆起の時期を異にする数段の土地が発達して緩傾斜をなし、標高10mから20mの低地に連なっている。部落の多くは海岸線に沿うて展開し、その背部は年中緑で包まれた農耕地で、西南から北東へ走っている台地地に連接している。本島は才三紀層体に属し、1500万年前から3500万年前ぐらいの間に隆起して出来た島であるが、隆起サンゴ礁(別名琉球石灰石)と島尻層から形成されている。島は36部落からなるが、そのほとんどが海岸線に沿うて点在している。27部落が海岸線部落であつて、6部落が山間部にあり、残りの3部落がその中間部にある。この島の中心は、湾部落、赤連部落である。この両部落は都会の小さな町と少しも変わらない程発達している。現在では湾部落に町役場がおかれているが、昭和31年9月合併までは、喜界町と早町村にそれぞれ役場がおかれた。現在の役場は近代的な鉄筋建築で、親しみのある町民の窓口となつてゐる。

気候は亜熱帯気候とほとんど大差はない。海岸の白い砂と隆起サンゴ礁の海と山間部の緑とが調和して、まるで常夏の国ハワイを思わせる様である。バナナ、パパイヤ、ピンロージユ、アダン、蘇鉄など南国情緒豊かな植物が群生している。昨年度の気温をみると最高は8月の33.2度、最低は1月の6.3度で年平均約21.8度であつて、一年間を通じて温暖な土地である。その反面、雨がよく降る。年間3000mm前後も降り、降雨日数も年間3割も占め、110日にもなる。そのために、道路は泥道であることが多い。特に、山間部に見られる島尻黄土(しまじりまあど)で出来ている道路は一度雨が降れば、数日間泥道になる。晴天日数は153日、曇天日数は102日であつた。この地は台風銀座でもあるが、数

こそ多いが、あまり大きな被害を受けていない。台風防備のために家屋の周囲には、琉球石灰石を高く積み上げ、壁を作り、又蘇飲などで台風の非害を少しでも少なくしようという。

歴史から見地から見ると、推移の激しい島である。鎌倉時代の鬼界島は南島の總称であることは諸記録によつて明らかなところであるが、喜界島のみを指称したことは明確でない。鎮西八郎為朝が来島したことが昔から言い伝えられているが、むしろ伝説の色が濃い。平家物語にでてくる俊寛僧都の流罪はこの島の様であつたが、まだ確証の域には達していない。この島の歴史が明確になつたのは、文治元年（1185年）「壇の浦の戦い」に敗れた平家の落武者が来島したことから様である。小松三位中將平資盛卿、同小輔有盛卿及び、従弟馬頭行盛卿の三人と共に、従兵300余人が屋久島を経て、喜界島の東端浮浦（又は沖名泊）に上陸し、志戸桶村に入り、志戸桶、佐手久西村の境に居城を構え、七城と称し、ここに居住した模様である。その後3年周、平家の落武者はそこに居住していたがまもなく大島に渡島した資盛卿は一子を生み、その子は堀道、佐手久、志戸桶、小野津、伊佐久の五ヶ村を領し、大守になつたが、琉球王の遠征で降服した。その後、喜界島は慶長14年（1609年）に薩摩藩に服属した。現在、志戸桶部落の棟家が資盛の子孫であるといわれている。同じ年に直川智翁が初めて大島に甘蔗を伝え、翌年には製糖が始められ、数年後にその製糖法が喜界島に伝えられたのである。現在では、昔の製糖法を改良して、製糖を行なっているし、近代的な大会社が35年2月より操業している。元和9年（1623年）大親役（現在の村長の役で、琉球王府より派遣されていた）の制度を廃して、与人（その土地の名門が村長の役目をする人）を置き、派遣された役人と島民との専断をなくし、島の行政を円滑にした。その後代官をも置くようになった。寛政13年（1801年）には、中江万左衛門が白糖製方掛として来島し、享和3年（1803年）には、白糖上級令が下り、白糖の製造に一段と力を入れる様になつた。明治維新周近かになつた1862年には、西郷隆盛が徳の島に流され、村田新八はこの喜界島に流されたのであるが、1864年（元治元年）の赦免までの間に、寺子屋を設置しそれが後になつて1875年（明治8年）西郷校として出発し、現在の喜小學校に至つたのである。この島の教育の創立者ともいふべき村田新八の記念碑が郷部落に建てられている。1886年（明治19年）本島は喜界、早町西村に分かれた。1901年（明治34年）海底電信が開通され、内地との連絡を自由にした。40年後には電話が敷設された。その間の1931年（昭和6年）には中里海岸

の平地を利用して、飛行場が設置され、内地との交通の便が計られたが、それは一部上層の金持階級にしか利用されていなかった。内地との交通が便利になったものの、その反面、思わぬ大災害を蒙ることになった。オニ次大戦中に特攻部隊の基地となった。その結果、この島の39部落の中、ほとんどの部落が災害を受け、災害を蒙らなかったのは山間部の数部落にしかすぎなかった。戦後数年間は島民の生活も苦しいものだった。戦跡が今も当時そのままの形で飛行場に残っている。1946年2月2日からは本土と行政も分離され、米国琉球政府の管轄下におかれた。そして1953年（昭和28年）12月25日に、待望の日本復帰となり、1956年9月1日には町村合併により、今までの早町村と喜界町が合併して喜界町となり現在に至っている。日本復帰までの米国琉球政府の管轄下においては、苦しい生活の連続だった。もちろん奄美群島復興事業資金が支給されていたものの、それらはほとんど島の復興にあてられ、一般島民の生活にまで援助の手がさしのべることが出来なかったのである。喜界町が発足してからは、民間航空が開通され、この島の教育の中心ともいえる湧小学校在1960年に創立85周年を迎えるに至ったのである。

喜界島の産業は地質、地形及び人口構成によつて大きく左右されている。地質は隆起石灰石と島尻炭上によつて形成されているのであるが、前者は水によくとけ、透水性が大なるために、又、後者は粗悪な粘土がため水はけが悪いために、この島の農耕地は狭小である。オー表は職業人口を表わしたものであるが、農業人口が如何に多いということがわかる。水産業が10人ということは全く信じられないことである。漁類も豊富でありながら、その数が少ないということは、漁業を営むためには、大きな資金が必要なこと、農業より危険性が高いということ、及び獲得した魚を保存する方法、即ち冷蔵庫設備が完備されてないということによる。商業、運輸通信業、金融業などは、これ以上の発達は今のできないが、島全体がもつと豊かになり消費生活の榮榮があれば商業にしろ、運輸通信業にしろ発達すると思われる。それにはまづ、農業の生産合理化、工業の大規模化、とりわけ大会社の進出並びに町営の会社など出現、水産業の発達が必要である。

商 業	工 業	金 融 業	運 輸 通 信 業	公 務 自 由 業	農 業	水 産 業	そ の 他	合 計
864	67	45	329	1280	12268	10	912	15775
5.45	0.4	0.25	2.1	8.1	77.8	0.05	5.85	100%

第一表 職業人口

35.3.1 現在

農業にしても、飽和状態であるため、又、他の職業に就くことは困難であるため、転出あるいは出稼ぎが必要となる。オス表は最近における県外のみ転出が圧倒的で、71.5%も占めている。鹿児島を除く九州各県の都市より、関西、関東の大都市にあこがれるために、大阪、兵庫、東京などに、その転出者のほとんど集中するのである。関西にそのほとんどが集まるのは、地理的に比較的近いことにもよるが、親しみやすい土地ということによると思われる。従来から、転出者が多いということにより、信頼感、親近感を抱くことができるためである。

	34年 9月	10月	11月	12月	35年 1月	2月	計	%	
大 阪	13		9	8	9	14	53	43.09	71.54
兵 庫	12	不	8	4	5	6	35	28.45	
東 京	4		3	1	10	10	28	22.76	24.39
神奈川	1	明	1	0	0	0	2	1.63	
その他	2		0	1	0	2	5	4.07	4.07
計	32		21	14	24	32	123	100	

オニ表 転出者数

34.9~35.2

鹿児島県内の転出者については具体的な数字はわからないが、その数の多いことは推測しうる。戸籍人口と現在人口との差が、如実に表わしている。オニ表に依れば、戸籍人口と現在人口の差が、12152人もあり、その割合は43.6%にもなる。

戸籍人口	現在人口	男	女	戸籍数と現在数との差
27927	15775	6776	8999	12152
100%	56.4%	24.2%	32.2%	43.6%

第三表 戸籍人口と現在人口 35.2末日現在

第三表に示す如く何故に転出が多いかという理由は、前述した様に農業人口の飽和状態にもよるが、以前の農業生産の低さが原因したためであると思われる。しかしそれは島の経済力を支える大きな要素となつてゐる。農業の生産合理化、機械化が、より多く推進されればされるほど、転出の傾向が著しくなる。もちろん農業以外の産業、特に工業の発達が促進されれば、その傾向は少しでも和されるだろう。

職業人口についてはオ一表の様であるが、この島の産業の中心が、農業であることは論ずるまでもないが、平田は地形及び温暖な土地なために、農業に適した地形、気候が備わつてゐるにもかかわらず、地質によつて、その発展が阻害されてゐる。地質については前述した通りであるが、今一度論ずると、この島の中央部の台地「百の台」においてすら、珊瑚礁のあとがみられる程、珊瑚礁が多いのであるが、珊瑚礁は水に溶けやすく、浸水性が大きいために、肥沃度は極めて低く、又、島尻層という粘土層のために、水田化を非常に困難にしている。そのために、耕地面積が狭小になつてゐるのである。耕地面積が狭小なために、他の職業に労力を向けねばならないのであるが、島の産業事情と人口との割合から見て見ると、他の職業に就くことは困難なのである。オ三表に示した様な結果になるのである。オ四表は田畑の耕地面積を表わしたものである。

オ五表は農家一戸当の耕地面積を表わしたものであるが、オ四表とオ五表とから耕地面積が狭小であることがよくわかる。それは、農業用地

	全面積	田	畑	田畑計
面積	55.71km ²	2.75	18.56	21.31
構成比	100%	4.9	33.1	38

オ四表田畑の耕地面積 34年3月現在

農家戸数	農家人口	一戸当 耕地面積		
		田	畑	計
3374	15053	0.81	5.5	6.31 km ²

に比べて雑種地が非常に多いからである。その雑種地が多いのは、地質に関係しているからである。その地質は、砂土が、 15km^2 （ $\approx 6.7\%$ ）、砂壤土が 22.17km^2 （ 39.45% ）、壤土が 1km^2 （ 1.78% ）、埴壤土が 13km^2 （ 23.17% ）、埴土が 4.54km^2 （ 8.9% ）となっている。一戸当の耕地面積を増加させることは、非常に困難である。もちろん僅かながら増加している。オ六表は地目別面積を表わしているのであるが、オ四表における、田畑の耕地面積は、オ六表のそれよりも、 2.3km^2 、 5% の増加をみている。しかし水田については 0.85km^2 （ 0.9% ）の増加にすぎない。これ以上の水田化は困難と思われる。

	田	畑	山林	原野	牧野	宅地	公共有地	雑種地	計
面積	1.8	17.22	4.67	6.42	1.28	2.03	1.14	21.15	55.71
比	4	29	9	12	3	4	2	37	100

オ六表 地目別面積 32年3月現在

雑種地の37%というのは、この島の地質の事情が悪いことをよくあらわしている。このために低生産性という向題が生ずる。地質だけが、低生産性の原因ではない。一つには生産年令構成及び、男女人口の不均衡にも原因がある。男女人口の比率の差が8%、 ≈ 200 余人もある。世帯数3765戸、家族平均4.19人、男1.8人、女2.39人である。

年令別	男	女	計	就業人口	就業比
0～9	2151	2016	4167		
10～19	1419	1558	2977	947	31.71
20～29	691	1026	1777	1611	90.65
30～39	614	1093	1707	1606	94.08
40～49	579	1037	1616	1532	95.17
50～59	555	975	1530	1373	89.6
60～69	544	835	1379	1050	76.14
70以上	317	579	926	120	12.95
計	6870	9179	16049	8245	51.37

オ七表 人口構成 昭和30年現在

男女人口の構成からみても、男女の生産年齢構成の比率が違ふことがよくわかる。生産年齢の中心である20才代、30才代、40才代はいずれも、男子の生産年齢構成は女子の5割前後である。ここに向題点が存していると思われる。男子の数が少ないのは、島の経済事情から、島外へ、県外へ転出して就職しているためである。オ六表に表われている人口構成と生産年齢構成の女子への偏重は、よき結果とみなければならない。女子のそれだけの数で、この島の経済を支えているとも思われるので、それはそれなりに役割を果たしているのである。島民は、低生産性を廃除しようとし、且つ、生活水準を少しでも上げようとして、余剰労働力を県外、島外に向け、一方では、機械導入、土地改良等を行い、生産の合理化を推進させている。オ八表は主要農機具の使用状況を示したもののだが、まだ各農家が持つにいたっていない。しかしながら数年前と比べると、数段の進歩がみられる。数年前には、ディーゼル発動機50台、脱穀機18台という有様だった。32年にはディーゼル発動機194台、脱穀機動力、35台、人力525台の多きを数える様になった。

ディーゼル 発動機	カルチ ベター	畜力用 碎土機	噴霧キ	脱穀機	動力 耕耘機	收穫機	精米機	製粉機	精麦機
194	4	6	73	560	9	26	26	16	16

オ八表 主要農機具 32年3月現在

機械化もさることながら、整地化、専業化も促進されつつある。生産向上への一つの役割を果たしている。オ九表とオ十表はいずれも新規の経済規模である。これらを比較してみると、オ九表によれば、経営規模5反以下が、51.15%を占めているのに対して、オ十表では、57.3%で、昭和33年より6%強も多かった。33年の1町5反以上の農家は、30年のそれと比較すると、1.8%少ないが5反から1町に於いては4.9%弱、1町から1町5反に於いては、3%強も増加している。農家数全体からみても、約200の農家が減少している。これからみれば、農家の零細化への道を少しずつでも防いでいると見なければならない。一方、専業化と自作化への傾向も着しい進歩が見られる。オ十一表の示す如くなる。昭和30年に比べると、33年では、専業農家に於いて、4.8%増加し、オ一種兼業農家、オ二種兼業農家においては、それぞれ2.2%、2.6%も減少している。

経営規模	昭和 33 年		昭和 30 年	
3反以下	1043戸	30.84%	1200戸	34.2%
3～5	687	20.31	808	23.1
5～10	1091	32.26	963	27.4
10～15	428	12.66	337	9.6
15～20	97	2.87	151	4.3
20～30	35	1.03	44	1.3
30～50	1	0.03	2	0.1
計	3382戸	100%	3505戸	100%

オ九表

オ十表

又、自作農化の点においても、僅かであるが増加している。即ち自作農は2.3%の増加、自小作農は1%の増加がみられる。それに反して、小自作農では、3.3%も減少していることがわかる。

以上の様に考

察してくると、農家戸数農家人口の減少があるにせよ、生産の向上及び、生産の合理化を推進させていくために、自作化、専業化、整地化、機械化を漸次推進させている。

	30 年		33 年	
専	2360 ^戸	73.0%	2633 ^戸	77.8%
一兼	456	14.1	402	11.9
二兼	419	12.9	347	10.3
自	2912	83.1	2889	85.4
自 小	422	12.0	439	13.0
小 自	171	4.9	27	0.8
小	0	0	27	0.8
計	3505 ^戸	100%	3382 ^戸	100%

小作農家、小自

オ十一表 専農自作農

作農家あるいは、兼業農家の人々は、他の職業につくか、転出するかによつて、生計費を確保し、豊かな生活をしようとしている。前述の様に、県外への転出が多いのはこのためである。農業の中心は、何といつても甘藷である。水稻と比べると、その耕地面積、生産額は比較にならぬほど多い。水稻の作付面積の少ないの

地質によることは前述した通りである。もう一つの理由は、この島の農業総合計画推進方策の一部に、鉄血的農業生産性の昂揚を推し進めている結果による。例えば、糖業を初め農産加工品、畜産、養蚕、移出園芸作物の振興による鉄金作物の推進を図っている。特に糖業即ち、甘蔗栽培に力を注いでいる。薩島という特殊な事情に鑑みて、量を少なくして、価値の高い生産物に力を注ぐことに重点を置いている。この島は従来から、甘蔗によって生活を支えてきており、それが伝統となり、現状でも甘蔗が農作物の王座を占めているのである。才十二表は農作物の作付面積と生産額及び生産量を示したものである。

区分 \ 種類別	水稻	麦	甘蔗	甘蔗	果樹	蔬菜	養蚕	畜産
作付面積	324 ^町	338 ^町	655 ^町	567 ^町	45 ^町	80 ^町		牛50頭馬550頭
生産量	3800 ^石	3600 ^石	240 ^{万貫}	340 ^{万斤}	3万貫	32万貫	540 ^貫	豚800頭山羊420頭
生産額	3800 ^{万円}	1800 ^{万円}	5400 ^{万円}	12200 ^{万円}	150 ^{万円}	550 ^{万円}	50 ^{万円}	1000 ^{万円}

才十二表 生産量と生産額 31年度

作付面積については前述した様に地質の肉係上、以上の様にはなっている。生産額を見ればよくわかるが、甘蔗が全体の49%も占めている。甘蔗が如何に重要視されているかが、よく分る。甘蔗栽培が重要視されているのは、歴史的背景が大きな原因とはなっている。ここで甘蔗の歴史を顧みてみると、その歴史は非常に古く、慶長14年(1609年)豊川智なる人が琉球へ渡る途中、台風に遇し、大島に渡りつき、甘蔗栽培、製糖法を伝授したのが始まりである。実際に製糖が始められたのは、翌年であつた。数年後に晋界島へ伝えられた。大島に製糖の始まったことを知った島津氏は、元禄11年(1698年)に、甘蔗の栽培、監督、督励に勤め、47年後の延享2年には、従来祖伝である貢米を全部黒糖で上納することを定めた。寛政13年(1801年)には、中江万左エ門が白糖製造方外として東島した。そして享和3年(1813年)には白糖上納令が下された。島津氏は独占方法として、オーに、三島(大島、晋界島、徳之島)の砂糖が、他地に脱しない様に、絶てその私の販買を厳禁し、違反すれば罰した。元禄11年に甘蔗製糖、監督、督励のために忝横目を置いて増収を計った。男子15才以上6.0才まで、女子13才以上5.0才までを作用夫と称し、各々耕地を割当てて、甘蔗を耕作せしめ、除草、製糖に至るまで監督し、違反者には極刑を課した。こういう歴史的背景によって、甘蔗の栽培及びその製糖が今までも産業の中心とな

り、経済の大きな役割を果たしている。次ぎに兼業の主体ともいふべき畜産業について、略述すると、馬の名産地であるということである。東北の南部馬にも劣らないほどと云われている。現在ではあまり知られてはいないが、戦前には5000頭以上も飼育されていた。オ十三表は農家の家畜の飼育数を表わしたものである。本島の畜産業の中心は、豚と馬であり、豚は食用に、馬は運搬用、農業用、移出用に飼育されているが、豚が食用の中心となつてゐるのは、漁業の不活発に遠因している。漁業によつて肉を摂取するよりは、畜産によつてする方が、危険率が少いし、確実性があり、気楽な態度で行うことができるからである。更に兼業として営むには畜産業の方が時間的にも、経済的にも適しているからである。

年度 \ 種類	馬	牛	豚	山羊	兎	鶏
29	1645	111	1439	2293	284	12362
30	1756	147	1607	2185	286	15700
31	1825	158	1640	2300	298	15800
32	1860	162	1089	1497	259	15368
33	1654	102	1459	1531	296	16568

オ十三表 家畜の飼育数

次いで、生産数、殺数、移出数について述べてみると、生産数は鶏を筆頭に、豚、山羊、馬と続く、殺数においては、鶏は別として、豚の多いのが注目されている。その理由は前述した通りである。表を見れば分るが、自給程度の数は常に確保されている。肉屋の店頭に行けば、いつも豚肉が吊るされている。(我々都会人が、その高いのに驚いているが、ここでは非常に安価である。) 移出部門については馬がその大部分を占めている。産出した9割以上も移出している。馬の移出数が多いのは、従来から喜界馬として全国に知られたつていたため、現在でもその移出が多いのである。馬としても、馬を始め、畜産については力を注いでいる。これは、漁業収獲が少いことにもよるが、量を少なくして価値の高いものを生産する方針のためにもよる。畜産業の関連産業である酪農業については有望産業の様に思われるが、数年前にもその可能性について研究したが、地形については申し分がなかったが、気候の関係上、不適当ということである。

先に一言述べた漁業について、少し詳しく述べてみると、漁業は極めて低調な産業である。漁業を専業としている人が、10人であることから推察される。

島の沿岸漁業には、その魚類が豊富であるにもかかわらず、漁業が振作らないのは次の様な理由による。オ一に、漁業が他の産業に比較して危険度が高いこと。オ二に甘藷さ文作つていれば、生活していくことが出来るという気持があること。オ三に、漁業を営むには、その資金が非営に回るということ。オ四に、系満人（沖縄人）の漁法に立ち打ち出来ないこと。最後に、たとえ大量に収穫があつたとしても、貯蔵が不可能であること。以上の五つの理由は、いづれも島民性に要因している。自主性の不足、島国根性、開拓精神の次如、協調性不足等がその主なる原因である。オ十四表は漁業の経営者数と被雇者数を示したものである。

その全てが、一本釣である。兼業として漁業を営むものがほとんどで、その92.6%も

	経 営 者		小 計	被 雇 者	計
	個 人	共 同			
一本釣	40	90	130	410	540

オ十四表 経営者数と被雇者数 33年

占め、専業者は僅か7.4%に過ぎない。専業漁家が少いのは前述の理由による。現在では、専業者も10人に減少しており今後の強力なる対策が必要である。兼

専業者	兼業者
40人	500人
7.4%	92.6%

オ十五表

業漁家の全てがオ一次産業を兼業としてい
る。漁業施設が少いし、悪い、動力船5
未満が34隻（42.02モ）、5モ以上/
隻（5.85モ）で、無動力船23隻（92
モ）で、総計58隻（129.87モ）を数

えるに過ぎない。これは専業漁家が少いことを示しているし、漁獲高も当然少いことを示している。オ十六表に示す様に、その漁獲高は非常に少く、自給の域も出ていない。月平均2400kg（640貫）の漁獲高では、到底全島民の腹を満たすことは不可能の様に考えられる。年間一人平均2kg程度しか口に入らない計算になる。現状のままでは、漁業はすたれる一方であると思われる。それを物語するものとして、本年（1960年）3月1日現在の専業漁家が10人となり30人もの減少したことが

	主要魚類	漁 獲 量	金 額
一本釣	さわらかつあ	1564貫	54万円
追 込	すすめだい とびうお	3708	142 "
待 網	むろあぢ	2406	70 "
計		7678	266 "

オ十六表 漁獲量

挙げられる。島の指導者は、何れかの対策、手段を講じなければならない。

工業の中心は、伝統のある糖業と大島紬加工業との二工業である。工場の規模は92%までが3人以下である。即ち、ほとんどが、家内工業なのである。(オ十七表)生産額、販売額において、工業は農業に比べて劣っている。この島の中

規 模	工 場 数		従 業 員 数	
	数	比	数	比
20～30人	1	0.29	29	2.98
10～19	14	4.10	224	23.05
4～9	12	3.46	96	9.88
3人以下	317	92.15	623	64.09
計	344	100	972	100

オ十七表 規模別構造 32年3月

心産業である甘蔗糖加工業は、島の財源の重要な位置に占めている。32年3月現在、工場数210。そのうち、動力144工場、畜力66工場がある。一工場5人から10人の従業員を要し、統計1260人が、製糖業に従事している。工場の形態は共同経営もしくは個人経営である。32年でその生産量310万斤、1億2400万円の多額にのぼる。33年度において、その生産額は1億6000万円に増加している。これは農業の合理化などの影響と見るべきであらう。甘蔗糖業において、注目すべきことは、35年2月1日から生和糖業という大会社が、喜界島に連上し操業を開始していることである。この島へ如何なる影響があるか、期間がおかなければ分らないが、悪い影響があるとは思われない。その次に重要な工業は大島紬の製造である。戦前に於いては、その数は非常に多数あつたが、戦時中の戦災で、工場の大部分を失ひ、又、家屋の半数が戦災に会い、戦後の数年間は、食糧事情の悪い状態がつづいた。そのために、本来の姿に戻るには、ほど遠かつた。戦前の最盛期にはビールで足を洗う。と言われるぐらいその生産数も多かつた。現在では63工場で798人の島民に従事している。10人～20人の従業員がいるのは15工場である。生産額は1億2000万円程度である。工業には、その他に醸造業、木製品及び家具の製造業などがあるが、いづれも島内自給の程度である。甘蔗の生産は非常に多いが、害虫アリモドキの害臭のために、焼酎醸造にはほとんど使われていない。主に米と砂糖が原料となつてゐるが、米の産出高は自給の域をでるに至らないのだから、原料として使われる米は、その大部分が他府県からの移入である。甘蔗からアリモドキを駆除すれば、その生産量も増加すると考えられる。

最後に、運輸通信業について述べてみると、前述した様に電信電話はそれぞれ1901年、1941年に開通していたので、内地との連絡は不便を脱つことは

ないが、直接内地へ足を運ぶには、数年前まで、その不便に耐え忍んできた。昭和33年に、町営の喜界丸（55屯）が就航するまでは、奄美大島名瀬航路の豊洋丸一隻のみだったために、少し海上が荒れると、欠航がちだった。長い時には半月間も欠航が続き、不便を来した。喜界丸が就航してからは、島への船が2日に一度は来るようになった。それ以上に一段と便利になったのが、民間航空（全日空）が喜界（中里飛行場）・鹿兒島（鴨池）間に、開通された。しかし、利用者は極く限られ、庶民の手に届くには、ほど遠い。飛行機が開通したことによって、通信に一段と力がついた。では、島内交通はというと、31年に全島一周のバスが開通し、部落間の距離が短縮された。約33kmの循環線で、その乗降客は非常に多い。開通当時は、運転回数数ヶ月一回であったものが、今までは1日5回にもなっている。更に、港・洞原間の東西を結ぶ道路拡張工事が行なわれている。この道路が完成すれば、島内交通も一段と便利になると思われる。しかしながら、島外との交通を更に便利にして欲しいとの希望が、島民の中にある。現在、二隻の汽船が就航しているものの、海上が少し荒れれば、欠航しがちであるので、もつと安全性のある大型船の就航を望んでいる。それには先づ、港湾設備の充実、拡張が必要である。今のところ、大型船の寄航はむづかしい。隆起サンゴ礁のため、港が浅い。堤防も完成し、接岸も可能になっているものの、接岸能力が港で50トン、早町港で100トン程度では、今のところ致しかたがない。港湾設備の充実、拡張はこの島の経済に大きな影響があると思われる。喜界文化放送が1954年に、翌年に電気事業が発足した。ラジオ放送はマグネチック式（親子ラジオによる送受信）で、個人経営である。聴取者数130戸で、朝、昼・夜に三回放送が行なわれる。ラジオ放送は電気と密接な関係をもち、三回の放送は、いずれも電気灯火時間に行なわれる。現在では、普通ラジオ、携帯ラジオを持つ家庭が徐々に現われてきている。消費時代の波が、この島にも訪れようとしているが、それはあくまで表面的なことであつて、深く内郷を掘り下げてみると、もつと根本的な問題点が潜んでいる。根本的な問題点の是正が急務である。次の奥が問題になると思われる

- (1) 青少年の転出を放任しないこと。
- (2) 農業の生産合理化と機械化。
- (3) 教育の充実と教育施設の完備。
- (4) 工業の推進—家内工業の脱皮
- (5) 漁業の対策—漁家の増加

(6) 港灣の充実と拡張

青少年の取出は、この島の運命を左右すると考えられるほど重要な問題である。年々その数が増加の一途である。この原因は、この島に於いては、今のところ労働力が飽和状態であることによる。農業の生産合理化・機械化が進めば進むほど、この問題は深刻になるだろう。農業人口が年々減少の傾向は、全国的なものであるが、青少年の農業関心が薄れたことにもよる。喜界島では、農業の発展がなくてはならない。それは農産加工である糖業に大きな影響があるからである。糖業なくせば、この島の経済の維持発展は困難である。それ故若い人が少しでも農業に関心を持つようにするために、農業の生産合理化、機械化を行う前に、農業について高等教育を受ける機会を与えなければならない。高等学校が一つあるが、設備が不足している。産業教育推進のための施設が必要であるし、教育内容の充実も必要と思われる。中学校においても同じことが云える。

工業、漁業の発展も必要である。工業の発展性は大会社誘致にあると思われる島内において、労働力を需要することが出来るからである。糖業会社は、35年2月から生和糖業という大会社が採業しているので、乱立は危険と思われるが、大島紬製造業は、島内工業からの脱皮が必要である。漁業は、後場がバックアップをして、その大規模化と漁業従事者を獲得しなければならない。

港灣の充実と拡張は、交通の便がよくなり、内地との交流が激しくなり、好結果をもたらすと思われる。

最後に、今後の見通しについて略述するならば、現在でこそ、奄美群島復興援助資金がまだ町財政に繰入れられているが、それも2・3年後で終ることになっており、政府借入金にしても35年度会計から返済しなくてはならないことになっており、町財政が苦しくなることは必至である。それ故、地方交付税、市町村税、あるいは国庫支出金にたよるを得ない。奄美群島復興援助資金2600万円、それに対して、国庫支出金2000万円、租税3000万円、その他500万円が島の財政であることからみて、復興事業費が約3分の1を占めているのであるから、町財政の苦しくなるのは明瞭である。それ故、先に述べた根本的な問題を解決し、特に工業の推進をしていくと共に、農業の合理化を推し進めていくことが必要であろう。